

1 追剥の亡霊

十二時 霧深い真夜中の刻
枢に差し込む微かな光を頼り
鉄の鎖に縛られた六年を経て
再びこの地に立つ時がきた

これにてご免 錆びた手鎖から 5
干からびた手首を抜くのは容易い
古びた鎖の耳障りな音 朽ちた枢の軋み
ああ カタカタと骨の騒がしいことよ

俺はここだ 上着もなく帽子もない
襯衣は白黴で汚れ 髪はすっかり纏れ 10
両の眼窩に収まっていた綺羅玉は
気前よく それぞれ鴉にくれてやった

ああ 褐色のベスに鞭を入れた日々よ
奴らは愛しいお前をどこへ連れ去った
馭者の鞭に打たれて泣いてはいないか 15
石炭商の荷車を引かされてはいないか

俺様が歩とは何たる屈辱 だが致し方ない
見ろ 足元の霧は払われ
この荒野に広く遠く
朧げな月明かりが降り注ぐ 20

砂塵が舞い上がる長い道に
のろのろと広がる一点の黒い染み
おいおい 北部郵便馬車じゃないか
馭者はアンソニーの奴か

かつて俺を恐れるあまり白髪になった馭者よ 25
俺を騙して血だまりに沈めた奴
さあ急げフレッド 決して抜かるな
今だ 馬車を捕らえろ

馬たちは突進し 汗を散らして止まる
突然の衝撃に 馭者は落馬して死ぬ 30
気をつける だがしかし亡霊を
マスケット銃で撃って何になる

車輪を砕け 馬車を反覆^{かえ}せ
積荷も貴婦人もお偉方も蜂の巣だ
しめた戦利品だ 奪いとれ 35
ああ だが何てこった そいつを収める懐が無い

(宮原牧子訳)